

若緑 越谷

我儘な足がふいと歩き出して
いつの間にか下り立っていたこの私鉄駅
踏切を渡ると閑静な宅地が広がっている

自転車をこぐどこかの奥さんが僕を追い越すと
ふいに、道から畑ひとつ隔てた家の庭で
じっとこちらを見つめる白い犬に「今日は」と言う

ここは僕の澄む凸凹の台地とは違って
何処までも平坦に続いていて
こんな挨拶ひとつにもどこかゆとりがある

川縁を歩くと、そう言えば今日は休日
家族連れが若緑の川のほとりで御昼を広げる
僕の足元では一列に咲き並ぶ蒲公英が「見かけん顔だ」とささやく

国道へ出るとやかましい車の流れが頻りに
この街を貫く一本の不安を思わせたが
それをちらっと離れるとまた静かな佇まいにほっとする

帰り道、脱いだジャケットを肩にひっかけて歩きつつ
ここがごく普通の生活^{くらし}を抱いていることが何故か嬉しく
僕は自分の足に「ゆっくり座って帰ろうな」と言ってやった

(1984.4.30)